

ロシア・インテリゲンツィヤ

—その歴史的・社会学的考察—

村 井 研 治

Russian Intelligentsia

—Historical and Sociological Perspectives—

Kenji MURAI

Received April 30, 1980.

1. 「インテリゲンツィヤ」という語について

「インテリゲンツィヤ」という語はきわめて多義的なものであって、その意味は時代により社会により、あるいは人によって広狭いろいろに用いられている。ある人は、知識を所有しているとか、知的労働に従事している者ならば、すべて彼らをインテリゲンツィヤと呼んでいる。すなわち、積極的に行動できなくても、また行動しようとしなくても、知識や教養や文化をもち、あるいは物ごとを深く思考する人間であるならば、彼らはインテリゲンツィヤに入れられるのだというのである。むしろこのような積極的な行動の伴わない知識人のみをインテリゲンツィヤと呼ぶこともあった。我が国の大正時代に普及した「蒼白きインテリ」などは「雑草的なたくましさ¹⁾に欠ける」知識人を嘲笑的に呼んだ語であるが、この語の語源ともいうべき、19世紀のロシアの貴族社会に特徴的に現われた、一連のいわゆる「オプロモフ主義者たち」もインテリゲンツィヤと呼ばれていた。ところが、インテリゲンツィヤの意味を極度に限定して、知識をもち、その故に現存の社会体制を批判し、それを改善するために積極的な活動を行うもののみをインテリゲンツィヤと呼ぶことができる、とする人もいた。インテリゲンツィヤのこのような分類³⁾については、日高六郎の分類は興味あるが、結局はその解釈が広すぎて明確な定義を見出すことができない。またこれとよく似た語に英語では intellectuals、ロシア語では интеллигенты²⁾ という語がある。intelligentsia⁴⁾ (интеллигенция) は集合名詞で intellectuals (интеллигенты) は普通名詞だとする文法的な面での区別もある。さらにその内容においても、両者の間に明確な区別をおくものもあれば、おかないものもある。前者を主張するものは、インテリゲンツィヤは常に社会秩序に批判的な眼をもち、社会の進歩を刺激し、あるいは社会体制を変革しようと志すものでなければならないが、他方 intellectuals の資格はただ知識や教養をもつだけで足りるとする。これに

対して後者の主張では、intelligentsia と intellectuals とは全くの同義語であるとみている。たとえば、ロバート・ミッチェルズが「intellectuals は社会生活において特別な役割を演じるものであり、一般に現存秩序が知的活動の自由を妨げるところではどこでもそれに反抗する傾向をもっている。」⁵⁾ といっているように、二つの語は全く混同して使われている。しかしここでは前者の見解で、すなわち両語を区別し、社会体制を批判し、その改造に何らかの役割を果たすもののみをインテリゲンツィヤとして論をすすめたい。

「インテリゲンツィヤ」は世界の各国に共通した用語であるが、この語とそれを生むにいたった社会現象の由来を辿れば、それが19世紀のロシア社会の産物であることがわかる。この用語は「19世紀60年代のロシアにおいてボボルキン⁶⁾によってはじめて使用された」といわれる。この事実は「インテリゲンツィヤ」という語が元来特定の社会（ロシア）の、特定の時代（19世紀）に特徴的なロシア語であるということを示している。以後この語は他国へ輸出され、世界に共通する用語として普及していった。もっともこれの意味するところは使用される時と場所によって種々様々ではあったが。

さて、社会現象はその現象を示す用語の使用と同時に出現するものではない。ある社会現象の兆候が現われても、またこの現象が次第に広がりつつある時でさえ、これを表現する用語がすぐに作られるとは限らない。新しい現象がいよいよ一般的となり、世に支配的となった時はじめてそれを的確に表わす用語^{インテリゲンツィ}が作り出されることが多いのである。ロシアにおいても18世紀以前には個々の知識人（интеллигенты）は存在したが、社会現象としてのインテリゲンツィヤ⁷⁾は存在しなかった。18世紀の中頃「ロシア・インテリゲンツィヤの萌芽」が出現し、それは次第に花をつけて19世紀の中葉にはインテリゲンツィヤの最盛期を迎えたといえる。そしてこの時はじめてボボルキンがこの現象に「インテリゲンツィヤ」という名称をつけたのであった。

したがって、インテリゲンツィヤ一般を理解するにもその原型である19世紀のロシア・インテリゲンツィヤを解明することが必要であろう。そこで本稿では、ロシア・インテリゲンツィヤの特性は何か、そしてその特性がロシアのどのような歴史的、社会的条件の中で作り出されてきたか、あるいはインテリゲンツィヤの時代的发展はどうであったか、を明らかにすることを目的とする。

2. ロシア・インテリゲンツィヤの形成及び発展の歴史的・社会的要因

上述のようにインテリゲンツィヤの定義は人によって異なり、その定説を見出すことは困難であるとしても、すべての論者に共通した要素、すなわちインテリゲンツィヤに不可欠な要素が一つある。それは知識あるいは知性であり、これなくしてはインテリゲンツィヤは成立しえない。そこでこの知識がロシアではいつ、どのようにして導入されたかをみるのが第一の課題であり、次いで導入されたその知識がどのようにして社会的なものになっていったか、また社会にとって必要なものになっていったか、すなわちこの知識がどのようにして思想家や革命家たちにとって現存の社会秩序を批判しそれに反抗する武器となっていったか、をみるのが第二の課題である。

ロシアへの知識の導入、その国内での普及、そして知識人たちの社会や民衆に対する責任の自覚は次の過程を経て進んだ。

- 1) ピョートル大帝（1672年～1725年）によるロシヤの西欧化。
- 2) ナポレオン戦争（1812年）。
- 3) アレクサンドルⅡ世による農奴解放（1861年）。
- 4) 資本主義の発達。

以上の過程におけるそれぞれの段階はロシヤ・インテリゲンツィヤの発生、発達を促した重要な要因であるが、これらの要因の間には幾つかの密接な関係が存在する。そしてその中でも特に直接的な関係を見出すのは1)と2)との間および3)と4)との間においてである。文豪プーシキンは「ピョートル大帝は西欧への窓を開いた」といった。もっともピョートルの関心は限られた範囲に止っていた。すなわち彼は隣国から実用的な技術や科学、軍事・工業技術を受け入れることだけに関心をもっていたが、その後エカテリーナⅡ世によってさらに広げられた窓を通り哲学的思想がロシヤに流れこんだ。それはフランス百科全書家と呼ばれるヴォルテール、デドロ、ダランベールなどを代表とする人々の啓蒙思想であった。これらの人々とエカテリーナⅡ世は親しい交友関係を結び、自ら啓蒙君主をもって任じていた。（とはいえ彼女は啓蒙主義者を装うていただけであり、実際には啓蒙的専制主義者であった。）

要するにピョートル以後のロシヤは西欧の影響を受け日常の生活様式のみならず、知識の面においても大きく変化し発展した。そしてこの知識がロシヤ・インテリゲンツィヤに何よりも不可欠な要素となったのである。「若いロシヤの知識人たちは 西欧からもたらされた思想を海綿のよう⁹⁾に吸収した」が、やがて彼らはインテリゲンツィヤへと成長していった。

この成長過程は第二の要因であるナポレオン戦争に深く関連して進められた。ピョートル以後全ロシヤは最初は西欧の気分¹⁰⁾に酔っているようであった。そこには「一見人民の心を反映するがごとき民族的自覚も、民族的文学も、民族的哲学もなかった。ロシヤの作家は西欧を模倣して書いた。彼ら自身の人民の生活や仕事の中に題材を見出すことは悪趣味のごとく考えられた。」しかし「この傾向はナポレオン戦争以後一変した。結局は成功裏に遂行された苦々しい闘争によって新たな激情が目覚め、それは民族的自覚を刺激し強化した。詩人や小説家たちは今やロシヤ人たることを誇りとし、永きにわたって彼らの真似てきた西欧からその顔をそむけた。モスクワは新たに生まれた民族主義の中心となり、この民族主義にモスクワ大学はそれ相応の哲学をもたそうと試みた。この新たなモスクワ哲学はスラヴ主義として知られるにいたった。」このようにして民族的自覚はスラヴ主義を生んだが、「しかしながら この西欧化に対する 排他性は全モスクワの哲学者が有していたのではなく、次第に西欧の業績を取り入れてロシヤ文化を豊富にしようとする別の傾向が現われた。この傾向が西欧主義と呼ばれるものである。」¹¹⁾

スラヴ主義も西欧主義とともに西欧の偉大な哲学者の思想にその基礎をおいていたけれども、両者の間には全く相容れないものが存在していた。スラヴ主義者たちは、ドイツ観念論、殊にシェリングにその基礎をおきながら、外国的なものに対してはすべてに排他的であった。彼らはロシヤとヨーロッパを明瞭に区別して、「ロシヤには他のヨーロッパ諸国とはまったく異なる、東方スラヴ独特の進むべき道が存在する」と主張する。というのは、彼らは宗教的な要素、すなわち彼らの思想的根拠となり、彼らにとって神の意志と永遠なる真理を表わす正教という要素をもっていたからである。これに反して、西欧主義者たちはいかなる宗教的な要素ももっていなかった。彼らの信じたのは正教やその他いかなる宗教でもなく、個人の権利であった。そして「ロシ

ヤはヨーロッパの一部であり、ヨーロッパ諸国の文化的範疇に属する。だからロシアは西欧とまったく同じ道を歩まねばならない」と彼らは主張した。

スラヴ主義者は保守的であり、西欧主義者は進歩的であったけれども、ともにロシアを愛するという点においては共通するところがあり、この愛に彼らのあらゆる活動と努力が集中していたのである。両者は相対立するグループではあったが、結局はどちらもピョートル大帝以後におけるロシアの西欧化と1812年のナポレオン戦争の共通の産物であったといえる。そして主張を異にする彼らも専制政治、農奴制度には批判的であり、ヒューマニティを呼び戻そうとする点などにおいては類以点をもっていた。ロシアに導入された知識は国の内外を比較し、国内の現状を正視する眼を養った。ナポレオン戦争はロシアにおける民族的自覚のほかにも自由思想をも目覚めさせる役割を果たした。撤退していくナポレオンの軍隊を追ってフランスに入ったロシアの軍人たちはフランス革命の結果に接し、ロシアに未だ残存する農奴制度の悪を知った。これはデカブリストの乱の直接の一因となった。このようにして知識人たちの得た知識は単に彼らのための知識ではなくそれ以上のもの、すなわち農奴制下の現存体制を批判し、それを変革するための武器となっていたのである。彼らはこの武器をもって立ち上り、インテリゲンツィヤを形成していった。

この武器とはイワノフ・ラズムニクがロシア・インテリゲンツィヤの特性の一つとしてあげている「共通理念」といえよう。彼はいう、「知識労働の一定の成果を特徴的に保持したり、あるいは基本的な倫理・社会学的問題にある程度関係することを特徴とする人々はいつも存在したし、また将来も存在するであろうが、このような人々はまだインテリゲンツィヤを形成していない。個々の知識人を統一のとれたグループに組織的に結合させた時にはじめてインテリゲンツィヤが現われたのである。¹²⁾」と。彼のいうグループとかその組織的結合とかの概念は社会学の厳密な集団理論からいえば不十分なものとわざるをえないが、少なくとも彼はインテリゲンツィヤが個々の知識人を指すものではないことをいっている。それは上述のような文法上の集合名詞とも一致する。しかし彼は、どんな知識人のグループでも、かならずしもすべてがインテリゲンツィヤに入れられるとは限らないという。すなわち綱領とか行動とかいった何らかの連帯によるグループというだけでは、しかもそれが教養ある人々によって構成されていたとしても、それはまだインテリゲンツィヤとなるには不十分である、と彼はいう。では何が必要なのか。彼はそこに継承性を主張した。継承性とは、正確に言えば連続的機能である。18世紀の初頭以前に存在したところの、単に何らかの連帯によって構成された個々のサークルやグループには、この継承性はなかった。それらの個々のサークルやグループは特定の目的や利害をもっている、その他のサークルやグループとは何の関係もなかった。ところが18世紀の中頃からはじめてこのような継承性が現われたのである。彼によればこの時期とはノヴィコフ、¹³⁾フォンヴィジン、¹⁴⁾ラディンチェフ¹⁵⁾の時代であり、彼らがインテリゲンツィヤの萌芽となったという。この継承性を支える要素こそ共通理念であり、さらにこの共通理念から発展した共通活動である。

知識が真理を求めようとする時、それは社会に対する正確な観察、認識、分析、批判へと発展する。そしてそれによって個人的な利益、関心が放棄されると、人々の間には社会に対する共通理念が持たれ、さらにそれは現存する社会秩序を変革しようとする共通活動へと発展する。それは同時代の知識人に広がり、また次の世代に受け継がれその輪が広められていった。社会秩序の変革を志す運動には必然的に政府による抑圧が伴った。こうしてロシア・インテリゲンツィヤは

発生し成長していったが、彼らに政府の抑圧と迫害が加えられれば加えられるほど彼らはますます社会の矛盾と悪とを痛感し、その意識と活動を強めていった。抑圧、迫害と抵抗は相互にくり返されながらその度がはげしくな¹⁶⁾っていったが、この故にロシヤ・インテリゲンツィヤの歴史は「殉教の歴史」、「受難の歴史」と呼ばれる。ノヴィコフは革命的扇動者、自由思想家として迫害され、1792年捕えられた。フォンヴィジンは結局自分の作品の印刷を禁じられてしまった。ラディンチェフは「恐ろしい謀叛人」として死刑の宣告を受けた。しかし、減刑となりシベリヤに流され、その後釈放されたが、再び問題視されてシベリヤへ送られることになった。そこで彼は自殺した。1825年ツァリーズムと農奴制に反対して蜂起したデカブリストたちは、失敗して逮捕され、それぞれ絞首刑、懲役、流刑などに処せられた。ゲルツェンは「社会にとって危険極まる大胆な自由思想家」として流刑を受けている。オガリョフは「頑固なうち解け難い狂信者」として流刑に処せられた。ペリンスキーは農奴制反対の内容をもつ戯曲「ドミトリー・カリーニン」を書いて大学を追われた。バクーニンは外国へ亡命した。

第三の要因と第四の要因との間にも、ロシヤ・インテリゲンツィヤの発達にとって見逃すことのできない深い関係が存在している。厳しい農奴制度の社会にも徐々に資本主義関係が芽を出しはじめ、それは農奴制度を根底からゆさぶるようになった。ついに政府は農奴制度の廃止を余儀なくされたが、解放令が出されるや、資本主義はますますその進展の度をすすめていった。このように資本主義が発達するにつれて、それまでは見られなかったような新しい職業が要請されるようになった。それは事務員、教育者、法律家、ジャーナリスト、統計学者といった類のものである。資本主義の発達の段階に入ると、知識は生産組織のもっとも必要欠くべからざる武器となったのである。ここに現われたインテリゲンツィヤこそいわゆる^{ラズノチンツィ}雑階級人であった。貴族以外の種々の層から出て彼らは教育を身につけ、いろいろな職業に就き、あるいは社会の改革者として積極的な活動に従事した。ラズノチンツィが種々の階層の出身者によって構成されていたということは、それぞれ出身の階層の利害が異なっていたことを示しているが、この階層的利害の多様性にもかかわらず、彼らをロシヤ・インテリゲンツィヤとして結合させたものこそ共通理念であり¹⁷⁾共通活動であった。つまり「身分的な目的は世界観の舷の外へ放り出された」のである。そしてこの共通理念、共通活動を支えたものは古い農奴体制に対する闘争であり、殊に知識労働の分野における可能性を拡大し、官憲の妨害をうけないような法的な自由（言論、出版の自由）の要求であった。

3. ロシヤ・インテリゲンツィヤの発展——^{ラズノチンツィ}雑階級人の意義と役割

インテリゲンツィヤにとって第一にして欠くべからざる要素は知性、知識であるが、最初これを独占することができたのは貴族であった。当時貴族は他のすべての面におけると同様、知識の面においても特権階級であったといえる。しかしながら貴族がインテリゲンツィヤでもなければ、インテリゲンツィヤが貴族でもない。インテリゲンツィヤは身分や階級とは無関係である。そこでイワノフ・ラズムニクは、インテリゲンツィヤの第二の特性として「非身分性」「非階級性」をあげている。確かに初期のロシヤ・インテリゲンツィヤの構成員は貴族の出身者で占められていた。そのため当時のインテリゲンツィヤは「貴族インテリゲンツィヤ」と呼ばれる。しかし知

識をもったすべての貴族がインテリゲンツィヤとなったのではなく、その中の一部のもの、すなわち自分の出身の身分的利害を放棄し、共通理念をもったものだけがインテリゲンツィヤを構成することができたのである。インテリゲンツィヤの非身分性、非階級性を示すもっとも典型的な例をみることができるのはラズノチンツィにおいてである。すなわち知識に対する貴族の特権も時代の推移とともに次第に破られるようになってきた。ここに登場したのが雑階級人である。

「ラズノチンツィ」はロシヤ社会独特の用語であり、それだけにまた、それはロシヤ社会独特の現象でもある。この現象を生んだロシヤの当時の歴史的・社会的要因は、次のことに求められる。

- 1) 苛酷な農奴制下における資本主義的生産関係の漸進的な発達と両者の矛盾。
- 2) それに伴う階級の分解過程、殊に貴族層の分解および各階層間の変動。
- 3) 教育の普及と教育施設網の拡張および高等教育出身者の国家・社会による要請。
- 4) ピョートル大帝制定の官等表制度といわゆる「勤め上げた」官吏の世襲貴族への昇進の可能性。

1) 農奴制経済の基本部門は農業であり、それはいわゆる「自然経済」の支配を特徴としていた。そこでは直接の生産者である農民は土地を与えられるというよりも土地に縛りつけられることが必要であった。そもそも農奴制をあらわすロシヤ語 крепостное право^{クレボスノイエ プラウヴォ}とは「(農民を土地に) 縛りつける制度」を意味し、歴史的にもロシヤの農奴制はこのような過程において成立し発展していった。苦しさに堪えかねた農民は逃亡し、農民暴動を起せば、政府は逃亡者の搜索と処罰を強め、暴動の鎮圧と農奴制の強化にますます力を用いるようになっていった。そこで 農民は地主に全人格的に依存していたし、強制労働の状態におかれた農民の手に農業経営が委ねられている以上、そこからは農民の自主性が出るはずもなく、技術の進歩も機械の利用も見られなかった。このことは収穫率に反映した。すなわち多くのヨーロッパの諸国の中で収穫率ではロシヤはもっとも遅れた位置を占めていたといわれる。ところが緩慢ではあるが資本主義的生産関係が芽生え、発達しはじめると、工業その他の面で農業生産物の原料や食糧としての需要が次第に増大してきた。すなわち農業のための国内市場が大幅に広げられたことになる。ここで大きな矛盾が出てきた。すなわちそれは農奴制度そのものから必然的に出てくる低い収穫率と、徐々に形成されつつあった資本主義による農業生産物の需要の急激な高まりとの間の矛盾である。地主たちはこの現状を打開しようとして、一方では農奴制経済固有の搾取形態——賦役労働と年貢——を一層強化したが、他方では農奴制に頼りそれを支持する立場にある彼らが、資本主義的商品生産にも手を出しはじめた。その結果農奴制の崩壊と資本主義の進展とがますます促進されることになったのである。このことは「農奴制の在存した最後の時期に¹⁸⁾発達したところの、地主によるパンの製造とその販売は、すでに古い制度の瓦解の前兆であった」というレーニンの言葉によってもっともよく表わされている。

農奴制下における資本主義関係の形成・発達とそこに生じた矛盾および旧制度の行きづまりを、ブラツキーは次のような例をもって示している。「加工工業での工場数は1804年には2,399であったが、1860年（農奴解放の前年）には15,338に増加し、その労働者数は1804年には95,200人であったが、1860年には565,100人に増加した。外国貿易取引額も増加し、1804年ロシヤからの輸出は5,900万ルーブルであったが、1860年には1億8,140万ルーブルとなった。特に急速なテン

ポで主として自由契約の労働に基づく木綿工業が発達した。1804年から1860年にかけてのこの部門における労働者の数は8,000人から152,000人に増加した。それとともに強制労働に基づいた製鉄工業のごときもっとも重要な産業部門は停滞の時期を経験した。18世紀において鑄鉄冶金では世界第一を占めていたロシアは1860年にはイギリスの10分の1の鑄鉄しか生産していなかった。²⁰⁾自由契約労働に基づく産業部門の発達と強制労働に基づく部門の不振は資本主義の発達と農奴制崩壊の徴候を示していたのである。

工業の発達、農業生産物の需要の増大は国内各地の経済的分業と内外の交易を促したが、国家は農奴制の維持に固執しながらも工業や交易の発達を奨励した。このことは上述した地主の場合と同じ結果を生んだ。すなわち国家政府は行づまりかけている農奴制を維持し強固にするために、新しい生産様式を用い、それによって利益を引き出そうとしたが、しかしこの措置は客観的には国内の資本主義的要素をさらに強めることになり、その結果農奴制はますます崩壊の危機に直面するようになった。次のことはその一例といえよう。「交易における商人や富裕な農民の役割は貴族を犠牲にして高まっていった。もっともそれは緩慢に行われた。この高まりはロシアにおいて鉄道建設や蒸気による水運が広がりだした40年代、50年代に強まったが、このことは農奴の無料の荷馬車輸送に対する独占をほしいままにしていた領地所有の貴族の交易面での地位を著しく弱めた。²¹⁾」

2) 資本主義の発達に伴って階級の分解過程がはじまり、各階層内にもそれぞれ異質性が見られるようになった。この異質性は貴族層にもみられ、彼らは財産や富の規模の上だけでなく、出身の上からも同質なものでなかった。19世紀30年代の中葉に実施された第8回人口調査によれば、「領地をもたない貴族や、農奴の所有数20人以下という小貴族がロシアの全貴族の約60%を構成しており、その層の比重はますます増大し続けた。」²²⁾といわれる。彼らは自分の経済的地位を喪失したのみならず、社会的・政治的特権をも失ったのである。すなわち、彼らは分解しながら一連の下級官吏、雑階級的インテリゲンツィヤの列に加わっていった。レイキナ・スヴィルスカヤも当時の貴族層について次のようにいっている。「貴族層の範囲というのは当時の歴史的条件下においてはすでに地主・農奴制支持者階級に一致しなくなっていた。ブルジョア的インテリゲンツィヤを補給した要素の中には、その階級から脱落してブルジョア化した貴族家族の若者たち、すなわち封建的農奴体制の危機によって地主的生活様式から脱落した若者たちがいた。²³⁾」

3) 以上のような階級分解によって零落した貴族もあったが、逆に貴族の外から教育をつけて上昇したものもいた。これを促したものは教育の普及と教育施設網の拡張であるが、この必要性こそ国家社会の要請によるものであった。教育の普及、教育施設網の拡張、卒業者に与えられる資格とその進路、そこで教育を受ける子弟の出身社会層の変化、およびこれに対する国家の対応の変遷等を、「リツェー」「ギムナジヤ」「パンシオン」「大学」その他に分けて、みてみよう。

ロシアにおけるリツェーは元来すべての省庁、主として内務省勤務の高級官吏養成を目的とする名門貴族の子弟のための閉鎖的な身分的・特権の中等・高等教育機関であった。ロシアにおいて最初に開設され、そしてもっとも有名なものはツァールスコイエ・セロー・リツェー(1811年)である。文豪プーシキンも1811年～17年にここで学んだ。これは1844年にアレクサンドロフスキーと改名され、ツァールスコイエ・セローからペテルブルグへ移された。その他ニェジン、モスクワ、オデッサ、ヤロスラーヴリ等にも開設された。リツェーの他に1835年新しく法律学校が創

設されたが、これも名門貴族のためだけの学校で、法務省の法律官吏を養成することを目的としていた。リツェーも法律学校も例外的な特権を持っていた。すなわち優等で卒業したものには9等官の資格で国家勤務につく特権が与えられていたのである。この官等は資格において大学に相当するものであった。ヤロスラーヴリのリツェーは、はじめはリツェーでなくデミドフスコイエ学校と呼ばれ、ここへは貴族だけでなく雑階級人たちも入ることを許されていた。彼らはそこで行政勤務の準備教育を受けていた。ところがそれが1834年にリツェー基本法の適用を受けたのである。そこにおける学生の出身階層の割合については、「1834年までの時期の資料によれば、学生の概数で貴族が半数より僅かに多かったにすぎなかった。²⁴⁾」という。このように貴族の特権を誇っていたリツェーにも貴族以外の層から入る学生があらわれてきた。

中等普通教育機関としてのギムナジヤも、法令上は特定の身分には関係しないとされていたにもかかわらず、最初には実際には特権階級的なものであった。²⁵⁾ ソヴェト大百科辞典第2版によれば、「最初のギムナジヤは1725年ペテルブルグの科学アカデミーに附属して創設されたアカデミーチェスカヤ・ギムナジヤである。1755年モスクワ大学の創設とともに、それに附属して二つの部——貴族のための部と雑階級人のための部——をもったギムナジヤが開設された。1804年には学校改革によって、ギムナジヤは多くの県の都市にも創設された。そこでの履修課程は、下級学校（教区学校や郡立高等小学校）での3年の学習の後、4年とされていたが、1828年の法令で7年制に変えられた。県ギムナジヤでは授業料は無料で形式上は特定の階層にはかわりないものであった。1809年にはロシヤのギムナジヤの数は32、生徒数は2,338人であったが、1837年にはギムナジヤ数69、生徒数16,506人となり、1854年にはギムナジヤ数76、生徒数17,827人となった。」

ギムナジヤの設立と沿革、その数と生徒数の増加については概要以上のものであるが、生徒の出身階層の変化とそれに対する政府の方策を見逃してはならない。上述のように法令上は特定の身分に関係しないとされたギムナジヤも最初には実際には多くの貴族の子弟によって占められていたが、「1828年の法令前のギムナジヤには5分の2以上の雑階級人が数えられた。だがポーランドやバルチック海沿岸の県を除いてロシヤの学区だけをとってみるとこの比率は逆に²⁶⁾なり、雑階級人(2,030)の方が貴族(1,484)より多くなっていた。」といわれる。そして「30年代以後ギムナジヤに雑階級人がとめどもなく流入してくるのを抑制する手段として、行政の方策、授業料の制定ならびに値上げ²⁷⁾」の措置がとられた。さらに政府はこのようなギムナジヤから特権を有する貴族の学校を独立させる方策を考えた。これが「ブラゴロードヌィ・パンシオン」（貴族の子弟だけの学校）、「ドボリャンスキー・インスティトゥット」（貴族寄宿女学校）である。ブラゴロードヌィ・パンシオンでは短縮高等教育が貴族たちに与えられた。ロシヤの若干の大都市にもパンシオンが設けられて外国人、主としてフランス人によって開かれ、中等教育に近いカリキュラムをもっていた。

州のギムナジヤも庶民性をもっていた。たとえば「ペンザのギムナジヤにおいて1844年～45年の学年度では、貴族・官吏の子弟が全生徒の3分の2を越えていなかった。²⁸⁾ ニジニ・ノヴゴロドのギムナジヤでは地主貴族の子弟は3分の1より多くなかった。」他方では官吏が次第に不足してくると、従来政府はギムナジヤにおける雑階級人の増加を好ましくないものと考え、彼らの入学をできるだけ制限しようとしていたにもかかわらず、ギムナジヤ卒業の雑階級人たちにも国家勤務に直接入る道を開かざるをえなくなった。それまで貴族ギムナジヤの特権と考えられてい

た卒業時における14等官の資格は、1849年にはすべてのギムナジヤに与えられるにいたった。またギムナジヤのクラス分けが制定され、直接国家勤務につくコースと高等教育（大学）進学のためのコースに二分された。そして雑階級人たちはまた大学へも進学していった。

ロシアの大学教育の歴史は1725年にはじまる。ソヴェト大百科辞典第2版によれば「それは（ペテルブルグの）科学アカデミー附属のアカデミーチェスキー大学が創設された時である。しかしそれは1765年には『聴講生不在のため』事実上は閉鎖された。西欧の大学と異なり、ロシアの大学にはジェルプト（現タルツォー）大学とワルンシャワ（当時ロシア領）大学を除いて神学部がなかった。1802年～05年にジェルプト大学、ハリコフ大学、カザン大学の各大学が創設された。すでに16世紀より高等教育機関として存在していたリトワ大公国の学校がヴィリナ（現ヴィリニウス）大学と名づけられた。国家が教育ある官吏、教育者を必要としたためアレクサンドルⅠ世の政府は学校制度をつくることに着手せねばならなかった。1803年から教区の学校、郡の学校、県の学校が設置され、大学のある都市を中心にして全国が6区域に分けられた。」

同辞典によれば、1831年でロシアの全大学の教授その他の勤務者は462人、学生2,201人であった。大多数の貴族の子弟は大学以外で、すなわち閉鎖的なパンシオンとかリツェーで教育を受けていたため大学にはあまり関心を示さなかった。また医学や教育活動の将来性も貴族を尻ごみさせた。政府は学生中雑階級人の比率の多いことを恐れ、この構成を変えて貴族出身の学生数を増やそうとした。1809年8月6日に出された「官吏採用試験に関する法令」で「貴族が大学教育（それも法学部が望ましい）を受ければ昇進できる」旨が提示されたが、効果はあまりなかったという。

レイキナ・スヴィルスカヤは、²⁹⁾ダヴィドフが^{ソグレンツェツ}1849年に「同時代人」に掲載した論文の中で彼が大学における貴族の比率の多いことを世に印象づけようとして示した数字の奸策を指摘し、実際には雑階級人の数は次のようであったといっている。それによればペテルブルグ大学では総数653人の学生のうち貴族405人、雑階級人248人（約38%）、カザン大学では総数325人の学生のうち貴族141人、雑階級人184人（約56%）となっている。

このように教育を受ける非貴族出身者の数が増大するとともに、教育施設の数も増えていった。すなわちギムナジヤや大学のほかに軍関係の学校、高等師範学校、測量学校、建築学校、工業専門学校、鉱山技師専門学校等も増設あるいは開設されていった。社会の進展に伴い各種の技術や知識が必要になっていったのであるが、これらの知識や技術を教える教師もまた重要な存在となった。1829年に開設された高等師範学校へは直接神学校出身の一流の学生が集まり、そこにおける雑階級人の割合も大きかったという。

以上のような知識や教育の場への雑階級人の進出、そして教育をうけた者たちの政府への反抗に対するツァーリ権力の憎悪と抑圧の模様などをゲルツェンはその著「ロシアにおける革命思想の発達について」の中で生々しく描いている。「知識の渴望はすべての若い世代にはびこり、一般の学校にも軍の学校にも、ギムナジヤにもリツェーにもアカデミーにも、生徒や学生が満ちみちていた。もっとも貧しい家庭の子供たちでもいろいろな学校に入ろうと望んでいた。1804年には種々の特権をもって子供たちを学校へ誘いこんでいた政府も、今やあらゆる手段を講じて彼らの流入を制限している。すなわち入学や試験を難しくし、生徒たちには授業料が課せられ、文部大臣は農奴の教育権を制限する命令を出している。これにもかかわらずモスクワ大学はロシア文

化の殿堂となっている。皇帝は大学を憎悪し、これに怒りをあらわし毎年この大学の学生をひとまとめにして流刑に送っている。またモスクワへやって来ながら、大学を訪れることもなくこれを無視しようとしている。だが大学は隆盛をきわめ、その影響はひろがっていく。……モスクワに隣接した諸県出身の優れた若ものたちがこの大学をめざす。そして毎年卒業生の密集部隊が官吏や医師や教師として全国に散っていく。³⁰⁾」

4) 教育を身につける機会の増大については上述のようであるが、貴族外の出身者が教育を受けても、何らかの制度的手続きがなければ階層的上昇を期待することはできないであろう。ところがロシヤにはすでにこのことを可能にする制度が存在していたのである。これが「官等表」制度と呼ばれるものである。

この官等表は最初ピョートル大帝によって1722年1月24日発布された。これは官吏による職務執行の序列を規定したヒエラルヒー的段階制度であった。これによって文官も武官も上は1等官から下は14等官まで14の等級に分けられていた。そして19世紀の中頃までは14等官で一代貴族の資格が与えられ、文官は8等官で、武官は12等官で世襲貴族の資格が与えられた。1856年12月9日の法令によって昇進の制限が行われ、それ以後は世襲貴族の資格が与えられるのは文官では4等官以上、武官では6等官以上となり、一代貴族の資格は9等官より与えられ、14～10等官の官吏は名誉市民の称号を受けるにとどまった。一代貴族は、文字通りその資格は一代限りであり、その特権を子孫に伝えることはできず、また農奴つきの土地を入手できなかったが、世襲貴族はこれを許された。要するにロシヤでは官吏になれば一代貴族に、あるいは永年勤め上げて一定の等級を得れば世襲貴族に列せられたのである。

これは教育を受けて勤務に入り昇進した雑階級人の例ではないけれども、永年の勤務の末世襲貴族に登った悪徳きわまる「なり上り貴族」の例をラディシチェフはその著「ペテルブルグよりモスクワへの旅」の中であげている。それはザイツォヴォでの話であるが、概要は次のようである。「そこには数年前に退職した一人の貴族が住んでいた。彼は宮廷に勤務し炉焚き人からはじめて従僕、従僕長、献酌侍従を経て永年勤務し、いよいよ退職の時は8等官を与えられた。世襲貴族の資格をもった彼は故郷へ帰って土地を買い百姓をいじめた。」というのである。「8等官氏は、きわめて低い身分から出て、自分と同じ数百人の主人となっている自分に気づいたのである。」³¹⁾とラディシチェフは書いている。

以上のことから「官等表」によって官吏の受ける利益がいかに大きかったか、また当時のロシヤがいかに官吏優先、官吏重視の社会であったかということがわかる。そして官吏になりさえすれば非貴族の出身者にも貴族への昇進の道が開かれていたのである。ところが官吏といっても広義には単に官庁の役人にとどまらなかった。その他医師も、学者、教師も、芸術家も、俳優も広く官吏の範疇に入れられ、彼らにはこの官等表が適用され等級が授けられた。これらの中でも雑階級人の主な代表者はいわゆる官吏（官庁勤務の官吏）、医師、教師であり、さらにその中でも官庁の官吏が重要な位置を占めていた。これらの官吏の養成にはリツェーや法律学校のほか大学の法学部といった法律部門がその役割を担っていた。前にもみたように貴族の大多数はパンシオン、リツェー、法律学校などで教育を受け、大学へはあまり関心を示さなかったので、大学には非貴族の出身者すなわち雑階級人の比率が増し、それを恐れた政府はそこにおける貴族の比率を増そうとして、「官吏採用試験に関する法令」にみられる貴族優遇措置を考えたが効果はなかった。

学生数が若干増しても、それは雑階級人の増加に連ただけだった。ところが大学にあるいくつかの学部のうちでもっとも多く³²⁾の学生をもつ学部が法学部であったということは、当時のロシヤが官吏重視の国家であったということ、また国家社会がそれだけ官吏を必要としていたことを物語っている。当時のロシヤの法学部は法学者の養成ではなく、官吏の養成を目的としていたのである。法学部の学生数については次のような報告がある。「1836年以来ペテルブルグ大学の法学部は他のすべての学部を合わせた数の約2倍の卒業生を出していたし、学部が拡大し、法律部門と財政学部門とに分れた1845年以後は、この学生の優勢はますます強まっていった。モスクワ大学は1836年～1854年の間の18年間に、他の二つの人文科学部の卒業生747人に対し、802人の法学卒業生を出した。」

医師の具件的な例については次の章で述べるが、官庁、宮廷勤務の官吏の次に雑階級人の数の多かったのは医師であった。「医学校はすでに18世紀から雑階級人によって充たされ、彼らにとってはもっとも入り易いところであった。医者の主たる要員を出していたのはアカデミー医学校であるが、その他（ペテルブルグ大学を除いて）5大学の医学部もその卒業生を出していた。」³³⁾教師の需要も大幅に増え、レイキナ・スヴィルスカヤによれば、ペテルブルグ学区では1829年～1853年の24年間に教育行政に関する定員が3.5倍に増加したという。一般の中等・高等学校の教師に加えて軍関係の学校および神学校の教師の需要も増し、さらに家庭教師も増加していた。

ベリンスキーは「官吏層は化学的熔鉱炉のようなもので、ここを³⁴⁾通って町人的、商人的、僧侶的、僕婢的な身分の人々がこれらの階層の大ざっぱな外貌を失い、父から息子へと移るにつれて《パール》（地主、旦那層）へと変っていったのである。」³⁴⁾と³⁵⁾いっているが、このような熔鉱炉を作動させたものがピョートル大帝によってはじめられた官等表である。このようにしてつくり出された「雑階級人」とはロシヤ語では一体どのような意味内容をもっているのであろうか。それは日本語では「雑階級人」と訳されてはいるが、元のロシヤ語では《разночинцы》と呼ばれる。³⁶⁾《разноч.
разный》とは「異なる、種々の、様々な」という意味の形容詞であり、《чин》とは「官等、官位、官吏」を意味する名詞である。すなわち「ラズノチンツィ」とは「種々様々な層から出た官吏」という意味である。「官吏」はまた《чин》を同根とする《чиновник》という語でも呼ばれるが、カルノーヴィチによれば「《чиновник》という語は重要な地位になるにつれて《сановник》（高官）という語にとって代わられるようになる。」³⁵⁾と³⁶⁾いっていることから《чин》あるいは《чиновник》が意味する「官吏」とは元来はそれほど高い地位を指すものでなかったのかもしれない。結局「ラズノチンツィ」とは「種々の層から出て官吏あるいは官位を通してなり上った人々」ということになる。しかしこれはあくまで語源上の意味であって、実際にはこの語は官吏であってもなくても「18世紀末～19世紀にかけての、教育を受けた種々の身分出身（法的には型にはまらない）の人々の範疇」と³⁶⁾解せられるのが一般的である。ただ当時のロシヤは官吏優先の社会であったし、教育を受けた種々の階層出身者の多くが官吏になっていったことも事実である。このようにして「ラズノチンツィ」は言葉の意味から発展して次第に社会的な意味をも獲得していった。

教育を受け、知識を身につけた人々は社会の要求する種々の知的職業についたが、彼らは知識と教養をもつが故に、また知的・文化的活動の場にあるが故に、社会の現実を見るとともにそれに対して鋭い眼を注ぎ、それを変革しようとする活動に入っていた。批判的に思索し、現存体

制の変革を志す人々、すなわちインテリゲンツィヤの成員はかつては知識を独占することのできた貴族層から現われたが、今や彼らは非貴族層からも補給されるようになってきた。その活動は激しさを加え、彼らの活動の範囲はますます広がっていく。ここに登場した雑階級人たちは次第にその数を増しながら貴族にとって代り、いわゆる「雑階級のインテリゲンツィヤ」の段階が形成されていく。こうして「ラズノチンツィ」という語はさらに広い社会的・政治的意味を獲得し、それは「民主主義者と同義語として用いられるようになった。」³⁷⁾といわれ、さらにその当時では革命的雑階級人がインテリゲンツィヤと同義に用いられていたともいわれている。レーニンが³⁸⁾ロシヤ解放運動の諸段階を指摘し「1861年～1895年を雑階級^{ラズノチンツィ}あるいはブルジョア民主主義的段階」としたが、それは雑階級人の社会への大量進出と、彼らのロシヤ・インテリゲンツィヤ史において果たした役割を示したものとといえる。

4. 雑階級^{ラズノチンツィ}人の具体例

以上みてきたように雑階級人にはいくつかのものが考えられる。すなわち第一には一般的理解のように官吏であるなしにかかわらず、非貴族的身分から出て教育を受け、知的な仕事に携わっている人たち、第二にはロシヤ語の文字通りの意味に一致するような、各種の身分の出身者で教育を受けて官吏となり、あるいは官等を得た人たち、第三にはこれら官等を得て世襲貴族となった人々の子孫である。つまりあの時期には「貴族」として登録されていても、実はその親たちまたは祖先たちが貴族外の出身であるならば、結局は彼らは雑階級人ということになる。以下数多^{ラズノチンツィ}い雑階級人の中で若干の代表的な具体例を示してみよう。

19世紀60年代を前後して雑階級人が大量に出現したが、これに先立ってすでに現われつつあったその代表者をゲルツェンはその著「ロシヤにおける革命思想の発達について」の中であげている。それはロモノーソフ、ポレヴォイ、コリツォフである。天才的な学者、偉大な思想家であり、ロシヤにおける現代自然科学の創始者ともいわれ、さらに現代ロシヤ語の基礎をつくるのに貢献したロモノーソフ（1711～1765）は白海の漁夫の息子として生まれた。彼は1730年学問するためにモスクワへ出かけ、モスクワのスラヴァノ・グレコ・ラティンスカヤ・アカデミー、キエフの宗教アカデミー、ペテルブルグ科学アカデミー附属大学などで学び、1736年～1741年の間ドイツで学問を続けた。

作家であり、批評家として有名なポレヴォイ（1801～1867）はイルクーツクで生まれたシベリヤの小商人であった。彼は「モスコフスキー・テレグラフ」誌を発行して文学活動を行ない、文学的権威ばかりでなく、学者をも攻撃した。彼はどこの学校へも行かなかったので、学者たちの学問にあえて疑問をもっていたのだという。コリツォフ（1809～1842）はヴォロネジで生まれ、10歳まで教区の学校に通ったが、そこではただ読み書きを習っただけでろくに完全な正字法を身につけたわけではなかった。父は家畜商で息子を同じ仕事につかせた。息子のコリツォフは数百露里も家畜の群を追いたて、このお陰で遊牧生活に親しんだが、その生活は彼の最良の歌の中に反映している。若い家畜商は読書を好み詩の中に彼の才能を見出した。彼は民謡を書いた。

当時の大学には革命的な雰囲気が高まりつつあった。これを醸し出していたのは、はじめは貴族出身の学生であったが、その中にも次第に雑階級人も入っていった。革命家として、また無政

府主義者として有名なネチャーエフ(1847～1882)は1868年末～1869年初にかけてペテルブルグ大学の聴講生となり、学生運動にも加わったが、彼について次のような話がある。「ペテルブルグスカヤ・ストローナーのサークルで＜革命の道＞とか＜民衆に自由を＞などが叫ばれていたが、ここへこのサークルを作ったオルロフが見知らぬ男を従えて入ってきた。この男は肩幅は広がったが何か虚弱そうで、眼だけが人の注意をひいた。彼は自分から発言する気はないらしく、とうとう彼が出て行くまで誰もその声を聞かなかった。こうした態度が学生たちの好奇心を大いにそそった。学生たちはこの不思議な男が出て行って戸が閉るが早いかオルロフに矢継ぎばやに質問した。オルロフはその男の名はセルゲイ・ネチャーエフであること、そして自分と同じように教会の学校の教師をしていることなどを語った。彼はつけ加えて語った。——たしかネチャーエフはただの農民の家に生まれて16歳になるまでは字も読めなかった。彼はずっとペンキ屋で働きながら勉強を続けていた。——学生たちは、みんなブルジョアか(小)貴族の出であったので、この民衆の生み育てた息子の話は彼らに強い印象を与えた。……逆説的であるが、ネチャーエフはそのプランの実現のにめに、学生達——当時、ロシヤにおける唯一の革命的勢力であった——だけを頼りにしておきながら、同時に彼らを全然信用していなかったのである。ネチャーエフは、大部分が特権階級の出であるこれらの青年たちは、学問を修めてしまうが早いか、すぐにその破壊的思想を全部放棄してしまうと³⁹⁾考えた。」

医師が雑階級人の主な代表者の一つであることはすでに述べた。偉大なる思想家、哲学者であり文学批評家であるベリンスキー(1811～1848)の父はペテルブルグの医学校(内外科アカデミー)を卒業して医師となり、海軍軍医をして永年勤め上げて8等官を授けられ、世襲貴族となった。ベリンスキー本人は1822年～1825年チェンバール郡立学校で、1825年～1829年ベンザ・ギムナジヤで学び、1829年にモスクワ大学へ入った。そして1832年農奴制度に反対する内容をもつ戯曲「ドミトリー・カリーニン」を書いたという理由で大学を追われた。文豪ドストエフスキー(1821～1881)の祖父は司祭であったが、父は1812年医師となり、1821年からモスクワの病院に勤務、永年勤め上げて世襲貴族になった。ドストエフスキー本人は1834年～1837年パンシオンで学び、1838年～1843年ペテルブルグ陸軍工兵学校に在学、後作家となった。19世紀中頃のロシヤ解放運動の著名な活動家ペトラシェフスキー(1821～1866)の父は貴族とはいえ土地を持たない貴族の出身であった。彼ははじめポルタワの神学校に学び後医学校(内外科アカデミー)に移った。1821年医学博士をとって、勤め上げて4等文官となった。ペトラシェフスキー本人はリツェーに学び、娘はスモーリヌィ・インスティトゥットに学んでいた。

偉大なる文学的・社会的批評家であるドブロリュエボフ(1836～1861)はニジニ・ノヴゴロドの村の貧しい司祭の家に生まれた。彼は1847年に郡神学校に入学、1848年ニジェゴロド神学校へ、そして1853年ペテルブルグ高等師範学校へ入学した。偉大な思想家・哲学者であり、ロシヤの革命的民主主義者と呼ばれるチェルヌィシェフスキー(1828～1889)はサラトフの司祭の家に生まれた。彼は1836年神学校へ入学、1842年サラトフ神学校へ、そして1846年ペテルブルグ大学歴史・文学部へ入学した。

文豪アントン・チャーホフ(1860～1904)は作家となり医師となったが、彼の祖先たちはヴォロネジの農奴だった。チャーホフの祖父は精力的な企業心に富む農民であり、1841年自分と3人の息子たちのために3,500ルーブルを支払い、地主チェルトコフから自由の身となった。これら

の息子たちの一人、すなわちはじめは店員として勤めていたが、後にタガンロックで小さな商業を営んだのが未来の作家の父であった。作家チェーホフはタガンロックで生まれて育ったが、父は1875年家計状態が悪化し翌年破産してモスクワへ密出し、数年後家族もモスクワへ出ていった。その時アントン・チェーホフはギムナジヤで学んでいたが、ここでの修学を終えるまでタガンロックに止った。1879年そこを卒業し、その年の9月にモスクワ大学医学部へ入学、1884年卒業した。そして医師となり文学活動に入っていた。ゴリキー（1868～1936）は指物師を父とし、染物業者の娘を母としていたまぎれもない雑階級人であった。

5. 結 び

以上みてきたようにロシヤ・インテリゲンツィヤは時代の推移とともに貴族的なものから雑階級的なものへと変り、彼らの国家、政府に対する批判や反抗はますます激しくなっていた。そして「インテリゲンツィヤ」という言葉は政府にとって好ましからざる言葉となっていたのである。それについては次のような話がある。——内務省の何らかの命令書の議案に関し、当時の宗務院検事ポベドノースツェフがプレヴェに次のように書いた。「どうぞ《ロシヤ・インテリゲンツィヤ》という言葉を取り去ってください。誠に《インテリゲンツィヤ》というような言葉はロシヤ語ではないのです。誰がこのような言葉を考え出したのか、この言葉が何を意味しているのか、神のみぞ知ります。どうしてもこの言葉を何か他のものに代えてください……」と。しかしプレヴェはこの言葉を取り代えなかった。「インテリゲンツィヤ」という語はその時すでに社会に定着していたのであり、さらにその用語とともにその現象はそれ以上に社会における大きな勢力となりつつあったのである。

注

- 1) 新聞語辞典（特集—明治・大正・昭和の新語）. p.494, 朝日新聞社編, 1966年5月。
- 2) 思慮深き知識人でありながら、行動に移れない目的なき無気力な人間、空想の世界に生きる人間の代表者を、ゴンチャロフはその同名の小説の中に主人公として登場させ、彼をオブローモフと名づけたが、この作品を文学的・社会的に批評したドブロリユーボフはその著「オブローモフ主義とは何か」の中で、「この性格はオブローモフ一人にでなく、プーシキンのオネーギンにも、レールモントフのペチョーリンにも、ツルゲーネフのルージンにも共通して持たれている。彼らはみんなオブローモフ主義者である」と述べた。オフシャニコ・クリコフスキーはその著「ロシヤ・インテリゲンツィヤ史」の中で「この書物はロシヤ・インテリゲンツィヤの心理に関する試論でありそれはチャツキー、オネーギン、ペチョーリン、ルージンといったタイプである」と述べている。（Д. Н. Овсянко-Куликовский: Собрание сочинений. том 7; История русской интеллигенции. часть 1, стр. 1. Общественная польза, 1911.）
- 3) イワノフ・ラズムニクなどはこのようにインテリゲンツィヤを極めて限定したものとしてとらえている。詳細は拙稿「ロシヤ・インテリゲンツィヤ」（奈良学芸大学紀要, 人文・社会科学第11巻, 1963, p.79～91.）
- 4) 社会学辞典. pp.41～42. 有斐閣, 昭和33年。
- 5) Encyclopaedia of the Social Sciences. Vol. 8, p.118. The Macmillan Company, New York, 1963.

- 6) *Малая советская энциклопедия*. том 3, стр. 475. Москва, 1929.
- 7) *Иванов-Разумник : Что такое интеллигенция?* стр. 9. Берлин, 1920.
- 8) *А. С. Пушкин : Медный всадник* (プーシキン : 青銅の騎士) に「ここでわれわれがヨーロッパへの窓を開き, しっかりと足をふまえて海辺に立つのは自然の運命だ」とある。窓とはペテルブルグである。ペテルブルグはロシヤが西欧を見る窓である。 *А. Пушкин : Избранные произведения*. стр. 392, стр. 398. *Московский рабочий*, 1949.
- 9) J. F. Hecker : *Russian Sociology*. p. 24. The Columbia Univ. Press, 1915.
- 10) *Ibid.*, p.29.
- 11) *Ibid.*, p.29.
- 12) *Иванов-Разумник : Что такое интеллигенция?* стр. 6.
- 13) ノヴィコフ (1744～1818)。社会活動家, 作家, 教育者, 中流地主の出身。諷刺雑誌「雄蜂」, 「画家」などを出版し, 宮廷貴族の風習を非難, 農奴制に憤慨し, 町人の勤勉と徳行を称揚した。
- 14) フォンヴィジン (1745～1792)。18世紀の有名な作家, モスクワの中流貴族の出身, 商人貴族の代表者, イデオログ。「旅団長」「親がかり」などを書き田舎貴族や宮廷生活を非難, エカテリーナⅡ世に対する公開質問状を雑誌に掲載するなど大胆な活動を行なった。
- 15) ラディンチェフ (1749～1802)。ロシヤにおいてブルジョア革命思想をはじめて唱えた作家。その著「ペテルブルグよりモスクワへの旅」において農奴制と専制政治を痛烈に批判した。
- 16) *Иванов-Разумник : Что такое интеллигенция?* стр. 18.
- 17) *Там же*, стр. 9.
- 18) 16世紀末, 農民が南の肥沃な地を求めて移動することは, 北の地域における外敵侵入に備えての兵力の不足という軍事上の問題と耕作者の不足という経済上の問題を激化させるとしてボリス・ゴドゥノフが農民の移動を禁じて土地および住民の目録を作成した。この目録に「何某の地主のところにいる」と記載された農民はすべて地主のクレボスノイ (農奴) とされた。農奴制はここから始まったといわれる。農奴制とは ^{クレボスノイ} крепостное право, право とは「法」「制度」を意味し, ^{クレボスノイ} крепостной と同根の動詞 ^{クレピツチ} крепить は「固める」「固定する」を意味している。すなわち農奴制とは「(農民を土地に) 縛りつけた固まれる制度」である。
- 19) В. И. Ленин : *Полное собрание сочинений* (изд.5). том 3, стр. 184. Москва, 1958.
- 20) Ф. М. Бурлацкий : *Политические взгляды Н. А. Добролюбова*. стр. 6～7. Госюриздат, Москва, 1954.
- 21) Академия наук СССР, Московский государственный университет : *История философии в СССР*. том 2, стр. 9. Наука, Москва, 1968.
- 22) *Там же*, стр. 10.
- 23) В. Р. Лейкина-Свирская : *Формирование разночинской интеллигенции в России в 40-х годах XIX в.*—Академия наук СССР : *История СССР*, No.1 январь-февраль 1958.—стр.83.
- 24) *Там же*, стр. 85.
- 25) *Большая советская энциклопедия*. том 11, стр. 385. изд. 2, 1952.
- 26) В. Р. Лейкина-Свирская : *там же*, стр. 85.
- 27) *Там же*, стр. 85.
- 28) *Там же*, стр. 86.
- 29) *Там же*, стр. 86～87.

- 30) А. И. Герцен : О развитии революционных идей в России. — А. И. Герцен : Собрание сочинений в тридцати томах. том VII, стр. 212~213. Академия наук СССР, 1956.
- 31) А. Н. Радищев : Путешествие из Петербурга в Москву—Избранные философские и общественно-политические произведения. стр. 95. Государственное издательство политической литературы, 1952.
- 32) В. Р. Лейкина-Свирская : там же, стр. 89.
- 33) Там же, стр. 90.
- 34) Там же, стр. 84.
- 35) Е. Карнович : Русские чиновники в былое и настоящее время. стр. 4. С-Петербург, Типография, П. П. Сойкина, Стремянная, 12, 1897.
- 36) Советская историческая энциклопедия. том 11, стр. 843. 1968.
- 37) Большая советская энциклопедия. том 35, стр. 636. изд. 2, 1955.
- 38) В. И. Ленин : Полное собрание сочинений (изд. 5). том 25, стр. 93. Москва, 1961.
- 39) ルネ・カナック著, 佐々木孝次訳「ネチャーエフ」, pp. 30~33, 現代思潮社, 1964.

Summary

The word "intelligentsia" is used commonly throughout the world in various senses. We might consider the original meaning of intelligentsia by tracing back to the origin of the phenomenon to which it refers. Significantly the word "intelligentsia" was used first by P. D. Boborykin in Russia in the 1860's. As a result, it is a Russian term peculiar to a certain epoch and a certain society (Russia). We will investigate the meaning of intelligentsia in terms of its original referent, i.e. the Russian intelligentsia and the social environment in which it grew up.

While scholars have differing definitions of intelligentsia, we can find a common element among them. This is the element of intelligence or knowledge, without which the intelligentsia could not exist. Our primary task is to know when and how knowledge was introduced into Russia in large proportions. Next is to make clear how the knowledge introduced became necessary for the society; how it became the tool by which thinkers and revolutionaries could criticize or revolt against the existing order.

The process of the introduction of knowledge into Russia, its spread, its democratization among people and the increasing consciousness among the intellectuals of their responsibilities for society or the masses, passed through the following stages: 1) The Europeanization of Russia by Peter the Great. 2) The Napoleonic wars. 3) The emancipation of the serfs. 4) The development of capitalism.

Russia after Peter was much affected by Europe and changed not only in the ways of daily life, but in the sphere of knowledge. Russians were intoxicated with the European atmosphere. This tendency changed after the Napoleonic wars, which stimulated and strengthened the national consciousness. Moscow became the center of

the newly-born nationalism, to which its university sought to give an adequate philosophy. This new Moscovite philosophy became known as Slavophilism. On the other hand, gradually another trend of thought appeared which wanted to enrich Russian culture by the achievements of Western Europe. It was called Westernism. The Slavophiles and the Westernizers, though opposed to each other, were common products of the Europeanization of Russia beginning with Peter and the Napoleonic wars, and both had in common the desire to redeem humanity. The Western ideas absorbed by the intellectuals were not mere ideas for them, but more, arms with which they could criticize the serf system.

Ivanov-Razumnik pointed out the "common idea" as one of several elements characteristic of the Russian intelligentsia. Individual intellectuals found social solidarity through the common idea, and formed the intelligentsia amongst themselves. The common idea arising from knowledge brought about criticism of the régime, and led to "common action." Common action, i.e. bitter criticism, social movements, struggle against the régime, was inevitably attended by the oppression of the tsarist government. Therefore, the history of the Russian intelligentsia is called "the history of Martyrdom."

The development of capitalism shook serfdom to the foundations. As a result, the tsarist government could not avoid issuing the Emancipation Edict, which in its turn further stimulated the development of capitalism. As capitalism developed, it created a demand for many sorts of professions not found before; professions belonging to the intelligentsia, i.e. officials, doctors, teachers etc. The representatives of the Russian intelligentsia at this stage came predominantly from the *raznochintsy*. The Russian intelligentsia had consisted at first of persons from the nobility. Later more and more persons not of the nobility (*raznochintsy*) joined their ranks.

The stages in the appearance of the *raznochintsy* may be seen as follows: 1) The gradual development of capitalism under rigid serfdom and the resultant contradictions. 2) The process of differentiation within classes, especially within the nobility. 3) The spread of education and the expansion of the network of educational facilities due to the demand by the state and society for highly-educated people. 4) The Table of Ranks starting with Peter the Great, and the right for officials having a record of many years' service to receive "hereditary nobility."

An important element of the intelligentsia, as Ivanov-Razumnik remarked, is the non-estate character, the non-class character. To be sure, the early Russian intelligentsia consisted of the nobility, but the interests of nobility gave way to the common idea. The increase in the proportion of *raznochintsy* in the intelligentsia, i.e. the shift from the nobility to the *raznochintsy* elements in the Russian intelligentsia, was one of the characteristics of social change in Russia from the 18th century through the mid-

19th century.

Examples of the *raznochintsy* are seen in Lomonosov, Polevoy, Koltsov, Nechaev, Belinsky, Dostoevsky, Petrashevsky, Dobrolyubov, Chernyshevsky, Chekhov and Gorky etc.

In the 1860's the term "*raznochintsy*" had already acquired not only a social, but also a political sense, and it became synonymous with the word "democrats."